資料５-２-２：平成 18 年度 Course Evaluation（抜粋）

科目：看護過程（1 単位）

前期・30 時間・3 年生・64 人（履修済み学生の聴講 1 人）・講義

看護過程・看護実践・問題解決思考

科目責任者：三重野英子（30 時間）

科目担当者：前川幸子（30 時間）、原田千鶴、脇幸子、荒尾博美、寺町芳子、末弘理恵、宮崎伊久子
若杉加寿代、菅原真由美、北裕子、阿南典子、松原みちる、横山哲代（14 時間）

Ⅰ. 目的

科学的・創造的に看護を実践するための思考方法である「看護過程」を学ぶ。この学習を通して、あらゆる看護の場において個別的な看護を展開する基礎的能力を養う。

Ⅱ. 実施

前半は看護過程の基本構造の理解を目標に講義を行った。後半は事例演習（看護計画立案までのプロセス）をグループ学習によってすすめた。各グループに1名担当教員を配置し、指導・助言を行った。

No.	内　　容	方 法	担当教員
1、2	1.看護過程とは	講義・演習	三重野、前川
3、4	2.科学的な思考方法としての看護過程 1)情報収集～アセスメント		
5、6	2)看護計画立案　3)実施・評価		
7	3.看護を推し進めるもの		
8～12	4.事例演習	グループ演習	三重野、前川、原田、脇、荒尾、寺町、末弘、宮崎伊、若杉、菅原、北、阿南、松原、横山
13、14	発表会		

Ⅲ. 評価・課題

1. 科目の教育目標に対する評価

1）成績評価（64 人）：グループ演習 40%＋個別課題レポート 60%

・総合評価の平均値±SD（Min～Max）：86.3±4.9 点（72～94 点）　＊H.17 年度：84.8±6.1 点（68～98 点）

S(15 人、23.4%)、A(33 人、68.8%)、B(5 人、7.8%)

2）学生による授業評価：授業毎の授業評価シート　　（ ）は H.17 年度データ

		強くそう思う	やや思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全く思わない
講義 5 回の平均値	興味・関心がもてた	51.6% (50.2%)	44.2% (48.0%)	4.2% (2.2%)	0 (0)	0 (0)
	理解できた	27.5% (19.8%)	65.6% (75.3%)	7.0% (5.7%)	0 (0.4%)	0 (0)
授業全般に対して (n=61)	看護に対する関心の向上	50.8% (59.6%)	45.9% (36.5%)	1.6% (3.9%)	1.6% (0)	0 (0)
	講義のわかりやすさ	41.0% (23.1%)	59.0% (65.4%)	0 (11.5%)	0 (0)	0 (0)
	到達度	77.2±8.9%（全く到達していない0%～充分に到達 100%・平均値±ＳＤ）				

3）まとめ

授業全般を通して学生の関心や理解に関する自己評価は高く、グループ学習による事例演習に積極的に取り組んでいた。講義では、基礎看護学実習Ⅱでの看護体験を教材としたことが、看護過程の構造や問題解決思考を具体的に考え理解することへの動機付けになっていた。また、事例演習での積極的な学習姿勢には、各グループに１名専任で教員がつき、学生の思考過程をきめ細かに助言・指導できたことが影響していると思われる。

2. 看護学科教育目標への貢献

看護過程は、個別的看護実践の基盤となる思考方法であり、教育目標2に強く関連する。3 年次の共通科目であるため、基礎看護と臨床看護を繋ぐ科目として看護過程の授業計画を教員チームで検討したい。

科目：看護過程実習（3単位）

後期・135 時間・3 年生・55 人・実習

個別的な看護の展開・援助関係の発展・看護実践能力の洞察

科目責任者：三重野英子（135 時間）

科目担当者：前川幸子、原田千鶴、宮崎伊久子、松原みちる、菅原真由美、寺町芳子、末弘理恵
阿南典子、北裕子、若杉加寿代、里見美子、脇幸子、横山哲代（135 時間）

Ⅰ．目的

既習科目「看護過程」をはじめ、これまで学んだ看護の理論ならびに諸科学からの知識を個々の患者への看護実践に適用・応用し、看護を科学的・創造的に展開する基礎的能力を養う。

Ⅱ．実施

実習開始の 2 日間は学内で看護技術演習を実施。その後 12 日間、附属病院 11 病棟において臨地実習（一人の受け持ち患者をもち看護を展開）を行い、実習最終日は学内で看護実践検討会を行った。

Ⅲ．評価・課題

1. 科目の教育目標に対する評価

1）成績評価：学習目標の達成度 70 点＋実習態度 15 点＋出席状況 15 点による総合評価

・総合評価の平均値±SD（Min～Max）：83.8±10.1 点（36 点～96 点）　＊H.17 年度：82.5±7.4 点（62 点～94 点）

S（20 人、31.7%）、A（29 人、46.0%）、B（9 人、14.3%）、C（4 人、6.3%）、F（1 人、1.6%）

2）学生による授業評価の結果：52 人、82.5%の回答

■学内演習の意義
・自分自身の課題が明確になった、「自信」「落ち着いて」「安心して」実施できた。
・後期授業科目のグループワークや試験等と重なり、演習に向けての時間が確保できない。
－演習日が直前にせまるまで、グループワークなど他の作業に追われて、復習や練習ができなかった。しかし、緊張感をもって、復習・練習・技術チェックに取り組むことができ、とても効果的となったと思う。

■実習上での困難と解決
・記録が多くて、整理する時間がない。土日がない。睡眠時間がない。疲労が蓄積する。記録の書き方がわからない。
－記録の量が多く、実習と並行して行うことに困難を感じた。水曜日に（中日として）午後学内とかにして整理する時間をつくって欲しかった。睡眠時間を3h/日にして毎日をのりきった。

■実習指導者に対する評価
・全体に肯定的な評価・・・日々の助言、師長の一言が実習をすすめる上でヒントになった。
－看護師長さんの『自分のやりたい看護ではなく、患者さんが求めていることをやるのが看護』という言葉が印象に残り、自分の計画と患者さんの意思にズレはないかを考えるようになりました。

■教員に対する評価
・励まし、思考の整理や実習上の悩みを学生と一緒に考える
－ケアに関して一度やり始めたら、何でもないことで毎日できることでも最初の一歩がどうしてもふみだせず、とまどってしまうことがある。そこで『一緒にやってみましょう』という一言は本当に助かる。一度背中を押してもらえれば次からは自主的に工夫しながらやっていけることがよくある。

・今年度初めて行った学内演習は、学生にとって「自信」「課題の明確化」につながり、臨地実習また看護実践そのものへの動機づけとなっていた。効果的な学内演習に向け早期から教員チームで準備をすすめたい。

・学生は、「患者に直接かかわることから看護が始まる」「看護過程を用いることで個別的看護がつくられる」と、看護過程の意義を実感をもって捉えていた。しかし、看護の実践プロセスの客観視や情報の系統的な整理方法に混乱を来たす学生が多く個別指導に時間を要した。次年度は、看護過程の意義や基本的方法を効率的・効果的に学習できるよう実習記録、ケースレポートや最終カンファレンステーマについて再検討する

2. 看護学科教育目標への貢献

本科目は、看護実践能力の基盤形成を目的としている（全教育目標に関連）。学生は、3 週間の実習期間中は患者にかかわることで精一杯だが、実習後のレポート作成を通して看護実践の意味に気づきはじめていた。実習とその後の振り返りを通して、看護実践能力の基盤形成が確実になされている。

科目：リハビリテーション看護学（1単位）

前期・30時間・3年生・51人・講義

リハビリテーション・ノーマライゼーション・障害・障害者・リハビリテーションチーム

科目責任者：三重野英子（26時間）

科目担当者：末弘理恵（12時間）、横山哲代（10時間）

非・原田禎二（4時間）、TA吉原（8時間）

Ⅰ．目的

Rehabilitation や Normalization の本質的な意味を理解し、障害があるクライアントに対するリハビリテーション看護の理論と方法を学ぶ。

Ⅱ．実施

No.	内　容	方 法	担当教員
1～3	1.リハビリテーション看護学の主要概念 「リハビリテーション」「障害/障害者」 「ノーマライゼーション」「地域リハビリテーション」	・イメージマップの作成 ・新聞、雑誌等の資料を用い、リハの主要概念の理解への動機づけとする	三重野
4	2.リハビリテーション看護の目標と実践の場 1)リハビリテーション看護の独自性	・学生がもつリハ看護のイメージを教材に、講義を展開	三重野
5、6	2)リハビリテーション看護の場 3)リハチームにおける看護職の役割	・別府リハビリテーションセンター見学実習 （2グループに分かれ半日実習）	三重野、末弘 横山
7～10	4)クライアントの実像：当事者の視点	・グループ演習。各グループで学内の環境を当事者の視点で観察する（車椅子自立・車椅子介助・杖歩行・視覚の遮蔽）。	三重野、末弘 横山、TA吉原
11	3.リハビリテーション看護の方法論 ・事例紹介 ・理学療法士の視点と治療的アプローチ ・事例に対する看護アプローチ	・脳卒中患者事例をもとに講義・演習を行う ・教員と非常勤講師によるデモンストレーションを多用した講義	三重野
12			非常勤講師
13			非常勤講師
14			三重野

非常勤講師：特別養護老人ホーム若葉苑副苑長 原田禎二氏（理学療法士）

Ⅲ．評価・課題

1．科目の教育目的に対する評価

1）成績評価：前期試験60%＋見学実習レポート20%＋グループ演習20%

・総合評価の平均値±SD（Min～Max）：87.8±5.4点（73～98点）　＊H.17年度：87.8±5.1点（77～97点）

S（18人、35.3%）、A（29人、56.9%）、B（4人、7.8%）

2）学生による授業評価：授業毎に行う授業評価シート：授業評価14回の平均値　（ ）はH.17年度データ

	強くそう思う	やや思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全く思わない
興味・関心がもてた	67.7% (54.9%)	30.1% (43.8%)	2.2% (1.3%)	0 (0)	0 (0)
理解できた	49.7% (32.6%)	47.1% (62.1%)	3.2% (5.3%)	0 (0)	0 (0)

3）まとめ

・科目に対する興味・関心度、理解度は、前年度と同様高い評価であった。講義・演習の内容と方法については、次年度に向けて大幅な修正はせず、微調整レベルで計画したい。

・見学実習については、施設環境の見学に留まらず、リハ看護の実際を知る学習ができるよう、看護部と協働で施設各部署の看護の特徴を一覧できる資料を作成し実習資料として用いた。8割の学生が見学実習を有意義と認識していたものの、提出されたレポートは具体性が乏しく浅い内容であった。この課題を看護部と確認し、改善策（目的・目標の表現を見直す、オリエンテーションの強化、レポート書式の改善など）を協議した。

2．看護学科教育目標への貢献

理学療法士による講義は、リハチームにおける看護職の専門性を考える機会となっており、教育目標3、4の「他職種の専門性を尊重する態度」、「看護の専門性を追究する態度」の形成に寄与している。

科目：老年看護学実習（4単位）

前学期・180時間・4年生・55名・実習

老年看護・個別的看護・老年者/家族

科目責任者：三重野英子(180時間)

科目担当者：末弘理恵、横山哲代（180時間）、浜口和之（13時間）、TA 吉原悦子（54時間）

Ⅰ．目的

老年看護学および関連諸科学の講義・演習で学んだ知識を基盤として、老年者に特有の健康問題を査定し、その方が健康を回復・維持・増進し、その人らしくよりよく生き・生活できることを手助けする看護を展開するための基礎的能力を養う。

Ⅱ．実施

昨年度の課題である科学的思考力（自己のかかわりの言語化と看護としての意味づけ等）の育成について、個別面接やカンファレンスを意図的に設定し、看護実践の振り返りや事象の整理方法を具体的に助言した。

Ⅲ．評価・課題

1．科目の教育目的に対する評価

1）成績評価：看護過程の評価(80点)、実習態度(10点)、出席状況(10点)による総合評価の平均値±SD

全体（最終評価54人）	天心堂(20人)	若葉苑(16人)	健寿荘(18人)
82.1±7.3点	81.3±5.6点	83.1±7.3点	83.9±6.6点

2）学生による実習評価：実習終了後、無記名による実習指導に対する調査

調査項目	記述内容の抜粋
1.実習上での困難	・スタッフにより多少指導内容が異なっていたり、対応方法に戸惑うことがあったが、実習指導者や教員へ相談したり、こちらから積極的に尋ねたり、お願いすることで乗り切れた。 ・認知症のCtと接するのが初めてで戸惑ったが、看護師や介護職に相談し、「困ったら言って下さい」と言ってくれ安心して実習を行うことができた。教員にはケアに参加してくれたり、ヒントやアドバイスをもらい、ケアにつながった。
2.実習指導者に対して	・自分の考えた計画をチーム全体が支えてくれた。また、考えた計画を積極的に実行させてくれた。 ・わからないことや指導してほしい時、事前に学習したことを説明することで、私のわかっていない部分を丁寧に指導して下さり、具体的なアドバイスをいただいた。 ・「可能な限り考えた援助は実践してよい」と言っていただき、実践場面においては指導者が声をかけてくださった。
3.教員に対して	・自分が気づかなかったCtの反応を教員から聞いたことで、自分のCtをみる視点を変化させることができた。 ・Ctのことを一緒にアセスメントやケアの方法について一緒に考えて下さったことで学びを深めることができた。
4.臨床講義の意義	・他職種（理学療法士）のCt.への視点を理解することができ、同時に看護の独自性を考えさせられた。 ・医師の視点からのアドバイスやわかりやすい疾患の説明によりCtの病態理解が深まり、ケアにつなげることができた。 ・自分が受け持ちCtに経管栄養、BS測定等の援助を行う際、看護師の臨床講義でそれらの援助について学んだことで自信につながった。臨地での講義は、大学での講義に比べ、より実践的に学ぶことができた。

3）まとめ

学生は「ケアチームの一員である」という自覚をもち実習に取り組んでいた。スタッフ全体に向けての看護計画や看護実践のプレゼンテーション、様々な専門職が行う臨床講義への参加、指導者による学生の学習段階を理解したタイムリーな助言・指導が、学生のチーム意識につながったと考える。さらに、学生は、老年者の潜在能力の発揮に向けた看護実践や心地よさをもたらす看護ケア技術に高い関心をもっており、個々を尊重した丁寧な看護ケアを実践する態度が形成されていた。一方で、科学的思考を用いたアセスメントや看護評価については、面接やカンファレンスによる指導を強化したものの例年と同様の反応であった。次年度は、クライアントの全体像を把握するための情報収集シートを実習記録として用い、アセスメントの枠組みと項目の理解を促すことにより、アセスメント能力の強化を図りたい。

2．看護学科教育目標への貢献

学生は、ケアチームの一員という自覚をもちながら個別ケアに取り組む中で、教育目標1～4にある看護実践に必要な基礎的能力を培っている。

（出典：平成18年度Course Evaluation，p84,87-89）